なゝしとり

858
59

国立国会図書館　タイトル『なゝしとり』　請求記号 858-59

ガラス使用

858-59

春の日弘ひ乃木の芽をさそふ
緑乃月光も葉乃露にやとる
云美し京丹むこゝハ萬代もあし
す保しうあ祢てしおのつゝのは
て遊あそくこ神ハくはさの里
自適に
二永あまくの
ひとりし
不二乃山得見てゝ地主の意

あらし雲の行衛雲乃あまり
するねまゝ人濃きころもてが
清らすゝ文物ハ世情ハさらし
夜の日升照すらくまゝ意乃
秋乃降こぼるゝも唯此山茂
見ぬし丈母乃年の閑若をし思し
様あらしむ事もなく言葉ん
分るゝちに事終

二遊あそびの
二つや

東坡居士の秋遊まれハ五十とせあまり
ゆくゝ百年乃昼みしなあるも
とてたのしみすれことありして
様の木下んとふのすみのもとし文
菴農字ちかありあまとね
しこそ蓬遊ひも左よく遊ひこゝんハ
ゆみ玉乃孫も申ゝ白すらん
不敢無え

三遊ひの
三つも

雇乃足ふのし野をあと絶し
年しも二の秋名ふし人のいく俤
名ある島ハ寺ハろもやあい
昔はまをるもみ女子遊ぶらよ

名取し翁志るし

寛政八丙辰年

秋の遊ひ

雁啼やきえて又見ゆ天乃川　可都里

月ふ支操農秋哉もゑ行く　士朗

柳散る宿ハ桂も蒼むらん　斌青

雨落家のところも佳し哉　斗入

馬追ハセり立ら追し朝朗　岳輅

くれるといふもいふに狙乃子　青

小松寺外御所の桜姫ぞうかゞり
朗

露の如まりし夕ゞの泪の中
洛

ゆ鶉るゝ後より一声郭公
入

奈良ハ七重ても山のさくらぬ
朗

まう稚児逢ミしけぬ心に哀
青

秋涼し縞て足袋切こそ
入

月寒し吹草葉も色にほし
洛

雪踏わけれ播禾乃金かは
青

蒲公英花咲も形も彩農腹
朗

ちれのさくれぬ近きもむらくも
洛

西念の春乃栖やあすの兔
入

車出るうちに泣人を誰ぞ
朗

此雨哉きゝの乃雨と名付たり
蟹守

はらゝくも出よれ若杏
鏡平

世中をすてしの上禅の袂
五芳

臼杵の所へ山のゝひろまる
里

釣針の曲れる人につよく恥て　平
棣棠ちれも卯花炊飯　守
秋風乃白河まてハ程遠し　里
火ま侍をあけ方の月　芳
されハこそ蔵は御法とや取れ　古
己の噂さく千鳥啼なる　平
此節ハうれなき冬のまも架　芳
二布保しうれ裏の撥木　里

吉日孔あとハ大かた之直日毎て　平
あかし浦て雨ふ畝火耳成し　宇
山鳥乃尾呂ハ見もしと立向ひ　里
ちゝの瘤まくちりて来なり　芳
文覚の取ちらしる影乃花　古
何ハ残日よりに藤の保ある　平

久きく

丹もしや舟に乗て鼓の川　漢甫

人の火を流れてゆくや銀河　菡涯

草庵

胡皃洗秋ハ来てから咲子声也　標冠

あさ皃ふむひとり咲て秋の色　嵐外

見定る露もあしや萩の姿　芝巷

悦ように秋残をしまぬ芭ら那　五芳

其芭むすけハ見ゆる戸口木哉　长鳥

色く其草の中よりも見ん芭　吳歌樂

太様乃なをすゑし遊女
尼となりくのちむさと哉
安通ひさりて待しさ哉
是かとり残るらんて

芭ちく母すそ移る何女郎花　其貫

如き志あるゆる草子更甲里　如毛

朝霧や嫁かの乃草かる声　梅丞

墨流し夕雲ハ皆露となり　白堂

走ゝゝ露の影もうつる伏屋かな　政尼

夕風乃吹定まりてあきのゝ花　帯川

古隣くと松に傍ても秋乃石　自楽

方匠の山寺に詣りけり

逢当とる日ゝ極楽様子かな

虫乃声杖に心をあかり聲　金英

身にしみし秋のこゝろを言はゞなり　壺堂

夕野芒尾花吹して立にけり　南丸

初雁やうしろ淋しとおもひあり　石蕉

夕月に小鳥合せられ峠茶屋　三車

いとなき世中とて

初雁とおもひまうきに落にけり　倭士

丁中ゝ凄かりおもへば月ある荻　甚成

飛ゆきして明日老丸乃出にけり　大江丸

我老をとふろく来くふ舟秋乃風　星布

沖の小嶋に波のよる見ゆ

詠めやりし皆根詠をとるとて

秋乃海よるも何ろくふ乃ふ宿　祥東

もやあひ乃かりまもやさ三日の月　素梁

詠るのあさ一もとの月折々の事　岱青

旅寺居むは身に添ふ月秋かな　舜珠

よ鳥は皆ふきく此まを来て帰り　可丸

嵐雪に吟もさらす茶かな

裏表是人は白文て勝色の尓　陌旧

胡も子葉鉄と戊なむ袂の事　瓜坊

山狸走く静子座は来く薄かれ　亡人　左好

此木白えりく表す不帰めしき
寂しく谷ら秋をのむ乃なかりき
定りせんさくもあらん

橋乃實を喰ふか乃雀かな　素厚

降雨夜いつとをしの秋寒さ　雲帯

おもしろき雲の出ても秋のくれ　芝阪

何処ともし鳥の飛ぶ秋の暮　方明

草扉やたまつてゐる秋の暮　雪蕉

その足は小部屋うらあきの暮　春坡

寛政九丁巳年

春の遊

春若秋は心乃あまれまるまで　士朗

たとつくいをて妻法月人　可彩堂

舟とよし山もまじるや霧らん　静菅

酒旗こゝおとより陰ゆくとの浮　捨来

蒲むしろおきざまの土川の出で　漢甫

駒をとふるまれ木因の顔　真洞

伊吹とハ十月頃乃名なりけし　里

剥出し沙汰の猿ぬ夕暮　萱

会釈もと洋瞿麦飾りしおく　来

恋ゆ隔しき茶の湯もなき　甫

落ちくる鳥のめつらしき隅田川　洞

真間乃里よりの川と出る月　来

幻花志らぬ琥とも参るなり　左岳

こゑのみあり秋ハ芦荻ふ阿れ　里

茶乃木と見ゆる植る家乃ふし　甫

此もの子ふ福の古木有る　洞

長生をしらく青柳と唄ひとも　里

古き詩の鬼とふる人〻　岳

連だし家三井寺の新居にて　岳洛

大角豆つめても胡ふつ春　桂五

子がけくいろめかせてふ乳婆　方明

捨てし教君ふ桃のとなり丹　朗

氷乃丸うかまれて雪ぬのく　岱青

柊なくふる口ミゆり乃枝　明

孫の子の箸ぬ尤よ持ちて　路

ゝ離き乗る抱ほの角力取　書

更く萩引きおける月乃影　少汝

水の上みもさるしく沢嘩　梅

小寺さは僧よ尚峰の秋　書

老木の紅葉一本深き哉　路

ちぎれて吹戸ひろ孤釘を打さ付　五

毎田の雲ふ亦迄く物う文　書

之のかいと撞くる鐘乃根ゑく　路

春なと雨花降るゝ吹へふし　明

咲時なり自ら山桜を見付る里　岸

何既嘆る四五十孤鳥　汝

ほく

きんく母堂ゑ来そる裏の山　蟹守

うくひす飛ふにまたゝける乃枝　猿左

雪乃都侍しれむ日さし落る哉　白国

宮ちれすやそこ沙に鳴く二日来す　外六

家庵や梅をもちえ茶菜畠　阿兆

春の日を何に流れん袴身衣　無曲

月ある雲に籠りて梅乃ふくむも　亀夕

坂ありて残遊びまうて春惜む　貞松

木かくれ行人声漏しあの春　遠之丸

春きて梅乃香をあらはしたる月夜哉　伯先

病中

床に見えり半分見ゆる都哉　蕉雨

春の夢よく見て寛て忘れけり　虎杖

玉打乃都ちらくちる二日月　森岱

正月も月はさく菊になき　菊羽

おとし艶やうすく書し人の恋　騏道

夕栄や海なき國をとひ入る厂　花縣

垣こしに居ても山もちよ雉子の声　天老

敵くも又水なき蛙乃さゝめかな　蘭二

ちらつくはやうするまゝの影かけ　丈龙

ある山寺にぬかつく

蝶とまれ小笠も佛の手にとまれ　捨来

松風をおとしよ田わしのかきあはせ　鹿古

かくまその先々峰田わし哉　文汝

馬刀呼われおもしろふて人なれ哉　方鳥

山崩も庭をむら入垣ある菴買人　恭昌

荘子画賛

言ふ蝶よ蝶や菜の花みなれて　二鄕

是乃人笑も霜ふのくれにあ　臥央

枯木をも花なくまくれ世の人　可申

江小源なく早咲て桃の雲かな　車大
あの花し紀庵や桜はさひし垣　士朗
行くさくらのとのまハと
詠ぬるおもうけよう引く
花乃庵も眼のうろにおはひ垣　鳥語
奥山のまちいつまく蘇活し　魯隠
雲霧れ流を蔵れ夜明のま　徐英

おあしかし

みこもり乳いとゆゑ常
やれ梅とも出て何や花
やかけのねさうすみ十と梁
あすつきさぬ春のいろん
老婦のたけ桜のちる白さく

一とせ兄出さる祥東侍る
河つらくとみ子眼の句法らう
情つらんとうくゝすゑ子の
なまくの人まゐし言
嘆出ゝるこのいとをろうゝれい
ふるしるこるく法し祇
行まへりもいの秋のなを
書とゝふめぬ

冬、張あはせ

さのりし農中小志んば接木哉
ゑ落さるゝ鳥のむ漢里
渉たゝの手勇しゝや漢ちんねふけ
身ほとゝ出る麻売て は
きゝ渡乃蝶と一里に詠けり
ゆふそし 露せんやゐる

闌更
祥東
可都里
鱒魚
六珈
美散

人く笑勝喰ふ胡ハきりんふく　臺珉

釘乃花出ぬ中庭の橋　里

この秋まつりまた並べる菖蒲草　夷

おとこのもどる宵乃むすひ　珈

瘤とらる鬼を待宵に老ふなり　奐

絶えて浮かるゝ伊勢乃御上　珉

ふるひあれ木乃きれ蝶やとて寒し之　敬

黄昏く菜ましりてく那柔　夷

なき時の音鞠を蹴りて眠の童　里

舞から逃れ信乃むのゆく　奐

網代木に忘丸乃家康乃紋　珈

さゝき侍のりて鷹法落つく　敬

又出より土鍋乃底をたゝきみ　珉

さらに宗祇乃枕ある寝まめ　里

離きく水から変く秋名子咲み　夷

さぬ河邑侍くらちさまれ乃香よ　標冠

鼻出す手まゝ男とも見えもせて　奥

袴着とどろ浅候す一吹　珈

十月の空は渕しく飛鳥川　蒜

足袋はく人とおもふ送りて　珉

金拾ふ袂らむなしく来るに見る　東丸

兄弟後くれ損え不生　夷

唇出し明石の月乃あかり淋さに　星

精修たゞ名法をしえてらん　魚

竹取の翁ともいふ話もなし　冠

毛しるし曲をし滑戸の山吹　菰

かつらのと足駄踏つく菜のあと　埔

恋しく人ゝ年春の女なれ　丸

ひとるき来く二人むまやる守れ稲り　珉

障子ぬらちの名よる雨あ本の　冠

冬之部

ふ二淺出し雲より出る神ばなれ　恒丸

筆の手乃年をかれたるもの二日月　春蟻

御紫と門ハ日ならく小時雨　玉屑

仁村旅泊

来る程の夜ハ少風の秋ぞなり　紫萩

とにかく今夜ハあけつゝぬる落葉哉　漫々

一押して人なき者戸まで枯野より　梨雄

大根曳く松ハ出もの不るりふなか　成美

むらとり鳴く千鳥鳴夜と来て多り　五貢

ささ、訪ふもあまぬ折あり小夜千鳥　如雪

むつましや霰の手取三軒家　一草

哀

帋衾一夜寝しも此夢なり　月居

なき妻の香をさゝむ冬籠　蓮阿

訪れて人に逢ふて冬籠　冥々

捨られし庵や松風相答　桂己

寒き無木に鳴りさはる夜の月　菊溪

山里や包むものなき冬乃月　臺珉

小僧ハ山に隠るゝとて

先形見家のはる〲遠さ見ゆ背月　鶴魚

其墓の里をとふて

糸杖にたよりし頃く聖か哉　静良

こもりゐや只なぬ菟ふ二乃山　冥叟

雪雲北北つゝらおれし荒波かな　長翠

おろく冬日和く行る雪の山　升甫

照る日北雪きへう北毎使よし　東鳴

よるの星月は先へ天ヶ成て寒か　柳莊

月花のくもりよりく手先礼　素岳

寛政十戊午年

夏乃あれせひ

舟の子やうき枕にかつく八重葎　暁臺

雨戦あらし乳牛月来にけり　士朗

啼ぬるゝ山伝ふる夜深く　岳輅

水清ら舟はすくふにぬれずゝ　方明

為明平朴の鷹条をはゞ長　似青

ぬゝのきれけ乃おりのちよ稚　路

頃礼荻を行く遊子軒の露　訥

七夕星流るやひのに稲すゝき　書

かく蔵川を西ふうけゝる夕景色　明

大工はらんの止む時をふし　朗

家臨り扶乃米を打拂ひ　格

きえて室平五ぬ空涼　明

ちゝくゞ雲とりて来る月の秋　青

禅子声の須戸を敲きす　驕
うれしかる人に恨やつもるらん　朗
尼寺来られし翁の姉妹　明
常ならし取ふ笠洗ふ茶わらく　青
若殿栗の色ゆるの弟子　朗
しらくと飛き須より夫を帰しむる　驕
足袋ぬぐ茶湯の僕坐　明
淀魚乃伊勢古の時ハ山家なく　青

入日岩そまる胡蝶乃雲　驕
般若むも木の宵さ前の花くす　朗
忍ぶれ人我通ふ関守　青
湧出る温泉の二節は流れり　明
あかれ定く歯の枝に存　朗
折てヽ少原苔はつ玉てら世　驕
積居蔵 芭を一来ぬらす　明
妻洗子 女ざらぬ色面初袖　青

錦にて池水を見てゐるあかね哉　楳

稲妻をはつせしやとんに神樵　語

役乃行者がわき志ゆるさず　雪

子日せし松に菜の声れ鞍　昨

香具山のうゑし奈良坂の春　語

きゝはなし峰に一声きけり　狐

秋のむしのこゑそ其の思ひ出ば　明

九せゝく

咲清くよく藤の花紫に染めて　斗入

宮ならぬ若葉の上の月哉　露吾

何市俤のなきさえ紫なる　友國

画盤に枝繁なり

賓客に来たともあそよ蜀魂　六珈

我よりも鳴すゞむしのなかりけり　莫二

昼乃戸ざして出られぬ新酒かな　壺位

江嵜乃遊ひ

保ちあかれ衣沙の引く静也　何旨

新たかゝるきよ秋のけしきかな　岳将

何乃木に同じ孤の呼子鳥　あ紀里

来ぬ友よりよ道の露さはふよ哉　五明

うしろ風や月枝の山風波乃音　雲兄

浮く浮世を見しは秋の旅かな　墨尚

久しく訪さりれ
樗叟子と居とに

さ篇く流れを見ては茶子留　静萱

白布し乃ちらしも見える小島かな　希言

梅子流いふ戦るに咲きけり菜　蔦三

閑かさや柚乃香こ不す一声かな　双鳥

萩菊ものやうける咲にかな　菓兆

染かゝて松の糸おりぬ五月雨　鶯暁

移居　何となく笠に冷しく

霧のうちあやしく人を呼しけり　・　美薮

月宗中やふ見の泊る嵩宝山　孤山

あき月翁るとの早川の館
冷いせんとりし人のあはれも三里
あまり北岨つくれとのほるも
くるりそり翁見すのるい

忘も字山誘も樗香の咲人にけり　真洞

声聲れ聲のゝふて淀八幡　百池

移きしの夜ハ櫓の音明かるも　丈雪

人寿し家手を開き川すゑ　定雅

月涼し秋ハなきものゝ流もの　棋價

夕立やかこもり残る雲乃層　一之

三井寺の嵐に道乃雲乃峯　昆明

あくしまに秋ちの花やき来にけり　鏡平

国立国会図書館　タイトル『なゝしとり』　請求記号 858-59
ガラス使用

甲陽鶏鳴館蔵

柳亭書

書林 京四條通河原町西へ入丁 勝田喜右衛門

858
59

国立国会図書館　タイトル『なゝしとり』 請求記号 858-59

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『なゝしとり』 請求記号 858-59
ガラス使用